
~ 逆襲球児 ~ To 七島麻美

瀬川しろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

＼逆襲球児＼ T O 七島麻美

【Nコード】

N 2 9 0 6 Y

【作者名】

瀬川しろつ

【あらすじ】

12の高校を混ぜた学校、「混黒高校」。
主人公「パワポケ」は今年ここに入学した。
しかしある日、彼に悲劇が起こった。
「パワポケ13」が小説化！

今作はその七島麻美編です。

「1」 すべての始まり（前書き）

パワポケを小説化したものです。
楽しんでいただければ幸いです。

「1」 すべての始まり

俺の名前はパワポケ。

少しベタな名前だけど気にしないで欲しい。

俺は小学生のころから

野球ばかりやってきた。

地区大会に優勝して、

日本選手権にも出場して、

あと少しで日本一ということまで
行ったこともある。

そして、

ついに今日から高校生だ。

「うつわー、すごい校舎だな・・・」

俺がいるのは混黒高校。

昨年、12の学校が合併してできた

生徒数が一万人を超えるほどのマンモス校。

様々なスポーツの大会で優勝し、話題となっている。

混黒高校にはキャンパスが12あり、

俺が今居るのが混黒本校のキャンパスだ。

「へえ、すごい校舎だね」

「それは今俺が言っただよ」

こいつは雨崎優輝。あめざきゆうき

中学生のころからずっと俺と同じチームだった。

「でも、校舎より野球部だ。強いチームだといいな」

「ははは、それだとレギュラーになれるかどうか心配だなあ」

「ユウキは心配性だな。俺達の力でここの野球部に革命かせを起こそうぜ！」

「どこかのイ。ズ。イレ。ンG Oみたいだね」

桜の舞う4月、混黒高校に俺は入学した。

こうして俺の3年間の物語は始まった。

もともと、それは決して良いとは言えなかった。

「2」 混黒な生活

俺達は混黒高校のグラウンドにいた。

「ようこそ混黒高校へ。俺が野球部監督の九能^{くのう}だ。
ここにいる連中は12の地区から集められたエリート中のエリート。」

競争は激しいものになると思うが、この競争についていけなくな
った者は

即座に別のキャンパスに行ってもらう、以上だ」

（ざわざわ）

「なあユウキ、別のキャンパスって何だ？」

「なんだ知らないのかい？」

混黒高校は12の高校が合併してできた超巨大校なんだよ
「なるほど」

ということはこの場所だけが混黒高校じゃないということか。

「で、合併前の学校は全部「分校」で名前が残ってるんだ」

「それをキャンパスと呼んでるわけか」

「聞こえがいいからね」

でも、いきなりここからのスタートということは俺達、期待されてるんだな。

（ざわざわ）

『おい、あそこにいるのはY中学のパワポケと雨崎じゃないか』
『マジか。まあいいんじゃないね、別に』

「ほら、なんだか噂になってるよ」
噂というよりは、軽く流された感じなんだけど・・・。

「おいパワポケ！ちよつとこっちで打ってみろ」
「九能監督だ。ハイ、分かりましたっ！！」

（カキーン！）

『おいおい、あれが一年生かよ』
『まあいいんじゃないね、どうしても』
『どうしてもよくはないだろ』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「次は雨崎だ、投げてみる」
「はい、分かりました」

（ピュッ！）
（バシッ！）

小学生のときから同じチームだけど、
やっぱりユウキの球はスゴいな。

「なあなあ、どうだった、俺？」

ユウキはどうとも言えないような笑顔で俺に言う。

「……この笑顔を見ると、

コイツがスゴいやつだって言う実感が沸かないんだよなあ……。
まあ、いいけどさ。

「今年は期待できそうだな。だがいい気にはなるなよ。
重要なのは今の能力ではなく、これからの成長だ！

これまでにお前達が覚えてきたことなどあまり役には立たない。

初心に帰って精進しろ！」

「はい！」

結構言うな、あの人。

こうして俺の高校ライフは幕を開けた。

くある日く

「あー、疲れたあ。やっぱり高校の野球部はレベルが違うよ……」

「でも俺達目をつけられてるな……」

「県大会優勝チームのエースと4番だからね。期待には応えない
とね」

「バカかお前」

「そこまでいうかな!？」

「俺が言ってるのは先輩達に

『何やこの一年坊が、調子に乗りおつて。

ちよつと前まで中坊やったクセに。大概にしとかんと目ん球引
つこ抜くぞボケエ!』

って思われてるってことだよ」

「そんなに複雑に思われてるの俺達!？ あと何で関西弁なの!？」

「まあいい、腹減ったから何か食べようぜ」

「(さらつと流したね・・・)」

「食堂」

「しかしスゴい食堂だね、

バツフェ形式で食べ放題なんてまるで高級ホテルだ
バツフェ？」

「バイキング形式だろ」

「えと、うん、そうだね(同じ意味だけど)」

「食べ物をとったらこの生徒カードを使うんだっとな」

(ピッ)

(合計300キロカロリーです)

「こうやって自動で食事のカロリー計算をやってくれるのか」

「生徒カード無くしたら大変だね。セキュリティもやってるみたい
だから

教室にも入れなくなっちゃうよ」

「メンドいな、これ。あー、破りたい」
「言ってる側からこれじゃダメだね」

（ばくばくむしゃむしゃ）

「見るユウキ、やや精神が鬱状態になっている獣がいるぞ」
「いや、餅田だよ？」

「やや、あんたらもお腹がすいたでやんすか？」
「ここは味もいいでやんすが、食べ放題でところが最高でやんす」
モチダ・デラックスだな。

こいつは餅田。もちだ

中学のときから同じチームで野球をしていたヤツだ。

「あんま食いすぎると監督に怒られるぞ。あの監督うるせーし」
「今軽く毒吐いたね」

「心配無用、Don't Worry でやんす」

「（英語で言い直す必要あったのかな）」

「オイラ裏ワザを発見したでやんす」
「裏ワザ？」

「生徒カードをかざさずに食い物だけ取ってしまえば
ごまかせるでやんすよ、褒め称えるがいいでやんす」
「いや、それはムリだけど。」

それにその監視カメラに記録されて後で生活指導されるよ」
「マジか！」

「やんすが取れた!？」

この学校は金をかけすぎだよな。

まあ俺達がグラウンドでやることは変わらないよ。

とりあえず食べたら走るかな・・・。

「3」 墮落の転機

「家」

「じゃあ行つてきます」

俺は家を出ようとした。

「今日もこんな朝早くから練習か？」

お前、野球以外のこともしつかりやつとけよ」

「父さん、俺には野球以外のことをやってる余裕はないんだよ」

「うるせえ。そういうのを視野がせまいっていうんだよ。

社会に出てから苦労するぞ、ククク」

「何でうれしそうなんだよ！」

父さんと違って俺は平凡なサラリーマンになんかならないの！」

父さんに一括してやった。

括かどつかは微妙だけど。

「おい息子、平凡をなめるな。

平凡ってのはいいことなんだぞ、崇めるが良い」

.....

（ばたん）

「・・・何かヘンなこと言ったか・・・？」
「言ったよ。」

「あはははははは」

「変な笑い方すんなよ。」

あのバカ親父、頭痛が痛くなってくる」

「俺はパワポケのお父さん、優しくて好きだけどね」

「さらっとスルーすんなよ」

「うちのお父さんは大会社の社長だけど、いいことはあんまりないよ」

「よく試合を見に来てくれたけど、まじめで優しそうじゃないか。でもうちの父さんは試合に結局一回も応援に来てくれなかったし」

「仕事が多忙だったんじゃないのかい？」

小学校のころはよく見に来ていたじゃないか」

「まあそうなんだけどな・・・」

でもいつから来なくなってたんだ。

野球が嫌いになったのかな・・・？

「おいその期待の超新星二人組さん、さっそくサボりか？」

「あ、先輩」

「何て名前だっけ」

さあ、何だっけ。

「・・・とりあえず校庭をランニングしてこい、ヒマ人どもが」

「はい、分かりました」

・・・でも練習ばかりやってても効率よくないよなあ。

「何だその顔は・・・たるんでるぞお前ら！」
「もうしわけありませんでしたあ」
「なめやがって・・・！」

くで

「・・・これが高校野球名物、地獄のノックか」
「実際にやつてる高校は少ないけどね」
「そっというのは言っな、ユウキ」

「その一年生2人！お前たちにはまだまだまだ仕事が残ってるぞ！」
「出た、ウザボウズ」
「そんなあだ名を！？」
「いいから黙ってユニフォームの洗濯だ！」

「できません」
「何イ！？先輩に逆らうと言うのか！」
「ホイ、俺たち疲れてるんでたぶん洗濯機にめっちゃ吐きます。
何にもしてなくて楽そうで元気そうな先輩にお願いします」
「くっ・・・てめえら覚えてろよ！」
多分覚えてない。

「大丈夫かい？あんなこと言って」
「どうせ目はつけられてるんだ、これ以上嫌われたって同じさ」
「パワポケには適わないや」

「ところで、バットの色は何色にした？」

「普通の金属バットだよ、人殴れるし」

「何をする気だったんだろうね。木製でも殴れるけど」

「お前はどーせ木製なんだろ、人なんて殴れないからな」

「バットは人を殴るための道具じゃないんだけど・・・」

「冗談だよウキ」

「目が笑ってないよ・・・」

なあ、俺たちが小学生のとき、

公園で最初にあつたときのこと覚えてる？」

「・・・ああ、覚えてるよ」

当然だ。

初めて会ったときのことだからな。

（6年前）

「ポジションはどこなんだよ、コラ」

「なんでおどしきみ！？・・・ピッチャーがいいな」

「ダメだよそこは。おれが4番でエースなんだから」

「ずるいよ、ボクだって4番でエースがいい」

「ダメなものはダメだ、しばくぞ！」

「じゃ、じゃあさ、2つにわけよう。」

「どっちかが4番でどっちかがエース」

「チツ、しかたねえな」

「わがまますぎるよ」

「じゃあおれは4番だ、打つほうが楽しいからな」

（現在）

「あの時のユウキはビビリすぎだったな」

「君が脅し気味だったんじゃないか・・・」

あの時、パワポケが逆をえらんでいたらどうだっただろうね」

「そんなの決まってるだろ」

決まってるの？

「俺がエースでお前が4番だ」

「そのままじゃないか、でもそっちも面白かったかな」

「バカだなお前、こういうことはやり直しがきかないんだよ」

「うん・・・そうだね」

うん、そうそう。

「ユウキ！俺はとんでもないことに気づいてしまった！」

「何、どうしたの」

「この学校に足りないものがわかったんだ！

美人で優しい幼馴染のマネージャーだ！」

「・・・はいはい。って、何でそんなに細かいの！？」

「ただの理想だよ」

「へえ、そう」

（ざわざわ）

（誰だよあのかわいい子？）

（あれは幻影だよ）

（いやいや・・・）

「ん？」

「美人マネージャーの登場かな？」

「違うぞユウキ、美人で優しい幼馴染だ」

「はいはい、・・・ああ違った、妹だ」

「なんだチハちゃんか」

「オーツス、ちゃんと練習してるー？」

「え・・・チハちゃん？」

「ぜんぜん前に会ったときと感じが違うのことはないか・・・」

「しばらく会ってなかったらもう忘れちゃったの？」

「どうも雨崎千羽矢あめゆき ちはやです。」

雨崎優輝のひとつ下の、美人でよくできた妹です」

「そのなまいきな話し方、やはりチハヤだな。」

「何だか雰囲気変わったな、そうか髪の毛を伸ばしたのか」

「そこだけ？　ほかのところも順調に成長中だよ」

「さあ、どこなんでしょう？」

「こら千羽矢！　いったい何しに来たんだ！」

「ユウキ、そんなにキレるなよ」

「学校の見学会に決まってるじゃない、来年ここを受験するのは決めるけど」

「一度は自分の目に焼き付けておかないと」

「焼き付ける必要はないと思う。」

「おニイにはちゃんと今日来るって言うといたはずだよ」

「あれ、そうだった」

「見学会なら、ほかの生徒はどこにいるんだ」

「教室で学校の紹介ビデオ見てるよ、つまんないから逃げ出してきた」

「忍者か！」

「こら、パワポケ！ サボってないでノック用のボール持って来い！」

「はい、わかりました！」

「あ、俺も手伝うよ」

「おい、一人でいいぞ！ ……チツ、まあいい」

（そして・・・）

（ガラガラ）

「ん、倉庫の電気がつかないぞ」

「誰かが入ったら自動で明かりがつくみたいけど、普通にスイッチがあると便利だね」

「常にパソコン常備してるもんな」

「何の話してるの？」

「あ、ボールのカゴ見つけ。あの奥だ」

「どうせなら練習器具も暗号化かなんかして出てくるようにすりゃいいのに」

「ん、なんだ？ こんなとこに壁があつたっけかな・・・」

「・・・あ！！ 危ない！ 触るな！」

「え？」

（がらがらがらっ！！）

「・・・今の何の音？」
↑千羽矢

「今は倉庫のほうから聞こえたな？」
「そうッスね」

「おい大丈夫かパワポケ！」
「ダンベル！ダンベルが入ってたでやんすか！？」
「餅田！早く箱をどけるんだ！」
「了解したでやんす！」

（ガラガラッ！）

「どうしたのおニイ！」

「積んであつた箱が崩れ落ちたんだ、パウポケが下敷きになった!」

(どうした、何事だ)

(どうでもいいんじゃないね、別に)

(いやいやいや・・・)

(ざわざわざわざわざわざわざわざわざわ)

「しっかりするでやんす!」

「動かしちゃダメ! 頭を打ってるから」

(ピポパポパ)

「あ、病院? こちらは混黒高校ですが・・・」

「・・・」

「フ・・・」

(・・・)
・・・
(・・・)

「4」 開拓な生活

（1ヶ月後）

「え、開拓分校へ移動!？」

「以前のように野球ができないのではパワポケくんを
おいておく意味がありませんからね、はつきり言って邪魔です、
ハイ」

「待てよ!リハビリは順調なんです!まだ・・・」

「病院から報告は受けとるわ。」

貴様の握力低下は原因不明、

元通りになるまでどんぐりかかるかわからへんらしいやないか」

「・・・・・・」

「まあキミに根性あればいつか本校に戻ってこれるともさ、きよっ
きよつきよ」

変な笑い方。

（それで・・・）

「そうか、この学校はそういうルールだ、残念だが仕方がないな」

↑ 九能監督

「ハイ・・・」

「ユウキ、レギュラーはお前のほうが先になりそうだな」

「すまない、もっと早く俺が気づいていれば・・・」

「お前のせいじゃない、気にするなよ。」

まあ案外コロコロつと直るかもしれないからな」

『治る』な。

（こうして俺は、混黒本校から 開拓分校とかいうところに移動させられた）

「家から電車で30分、結構遠いな・・・」

みーんみーん。

「うつわー、すごい校舎だな」

一番最初とは違う意味で。

つかめっちゃ貧乏くさいなここ。

田舎だし、やっぱり語尾に『だってばよ』とかつくのかな・・・。

「これが12あるキャンパスのひとつ、開拓分校か。」

ま、校舎より野球部だよな。ちゃんとリハビリできるかな・・・」

セミの鳴き声の聞こえる7月、開拓分校へ移動。
こうして俺の物語が本当に始まった……。

「今日から開拓分校にやってきたパワポケだ、ほらあいさつしとけ」
「えと、よろしくお願いします、ってばよ」
めっちゃめっちゃ軽かった。

「（あいつ、Y中のパワポケじゃねえか！）」
「……………」

「俺の席はここか」

「よろしく、私は木村よ」

「よろしく、最初は何の授業なんだ？」

「農業科学」

……………???

「しょうがないわね、ほら、あたしのを貸してあげる」
「あ、ありがとう」

しかし変わったが学校だ。
農業科目なんて初めて聞いたぜふう。

「おい、パワポケ」
「何だ、ってばよ」

「何だそれ、はやってるのか」
特に流行っているというわけではない。

「お前野球部に入んだろ。」

俺は詰井^{つめい}、ピッチャーをやってたあ」

「ああ、よろしく」

「・・・やっぱり覚えてないか」

「何を？」

「去年、お前のチームと3回も試合をしたんだぜ、
全部お前らが勝ったがな、フハハハハ！」

何が面白いんだろう、と思うパワポケなのであった。

「まあいい、ここレベル低くてな、お前みたいなのがくると
すんげえやる気が出てくるぜ。じゃ、放課後期待してるぜ」

「あ・・・でも・・・（ケガのことどう説明しようか・・・）」

（そして・・・）

ここが開拓分校の野球部か。
メンヴァーはたったの10人？
グラウンドもでこぼこだし。

「おい何をしてるんだ」

「部室はどこにあるんだ」

「部室だあ？　んなもんあるかボケナス」

「（そこまで言わなくても）」

「「ここで着替えるのさ」

「え？」

「ほらここにロッカーもあるぜい」

「じ、じ、ここにこここここの雨ざらしの!？」

雨のときはどうするんだよ!」

「そのときは教室で着替えてもいいことになっている」

「うへえ・・・」

本校に比べると雲泥の差だな。

これなら中学の方がずっとマシだったよ。

「や、パワポケくん。キャプテンの露口さ」

「よろしく願います、ってばよ」

「何だそれ、頭おかしいのか？」

別に頭がおかしいというわけではない。

「キミのうわさは聞いているとも、すごいらしいな」

「あ、ええと・・・(ケガしてることでどう言おうか・・・)」

「詰井と杉田以外は、

俺も含めて高校から野球を始めた人間ばかりなんだ。

野球を教えることが可能な人間なら大歓迎だ!」

「え? まさか、このボロ野球部、

監督とかコーチもいないんですか?」

「今さらつとヒドいことを言われた気がするんだが、まあいい。

監督はいないことないんだが・・・まあ、追々分かってくるだろ」

「?」

「それよりキミのバッティングを見せてくれないか」

(わくわく)

「わ、わかりました（マジどうしょ・・・）」

「すごいぞ、コイツは。何しろ俺がホームランを五本も打たれたんだからな」

（カキーン）

「え？」

「おい待てよ！何だその気の抜けたプレイは！ぶっ殺すぞ！」

「これが今の俺の全力だよ」

「・・・ケガか」

「はい、利き腕の握力がほとんど無くて・・・」

「じゃあ大畠おおはたと同じだな、

リハビリが終わるまでの間、この開拓分校にいるというわけか」

「（大畠？）」

「あーあーあー、おかしいとは思ってたんだよ。

こいつのレベルでこの学校に都落ちしてくるなんてよ」

「でも野球はうまいんだろ？」

ムラツチよりは教えるのうまいかも！」

「あいつより下手なやつがいたらそれこそ疫病神だぜ」

「パワポケ、君の事情はわかった。

さらし者にするようなマネしてすまなかったな」

「いえ」

「とはいえ、ここにいる連中は野球が好きでたまらない連中だ。ともにがんばっていいこうではないか」

「はい」

でも、このグラウンド、石ころだらけでっつこぽこやないか。
これをまず何とかすんべさ・・・。
ってばよ。

「5」 人生なんてこんなもん

「・・・・・・・・ふう」

こんなものかな。

「あら、グラウンド整備？」

木村が話しかけてきた。

「何かをするためには、まず地道な努力が必要なんだよ、by 川藤幸一」

「あ、自分の考えではないのね。でも感心な心がけなこと」
こいつ心にも思っていないな。

そう思いながらも俺は聞いてみた。

「ところで、大畠とムラツチっていったい誰なんだ？」

「ムラツチは体育の先生のあだ名よ、しばらく病気で休んでるけど
野球部の監督」

「で、大畠は逃げ出したんだ」

「ツメイか」

「逃げ出したってどういうことだ？」

「お前みたいにケガをしてここに来ただけど、ずっとリハビリば

っかりしてやがった。

俺たちのことなんかヤーイ、カースカースって思ってたんだろ」
「それで逃げ出したのか？」

「この学校は合わなかったんだな。
お前は知らないだろうけど、軟式野球じゃけっこう有名なやつだったからな。」

いきなり堕ちたのが耐えられなかったんだろうぜ」
「……………」

俺には耐えられるのかな……………。

「それよりパワポケ、これから用事何かあるか？」

「別にないけど」

「じゃこれから野球部でお前の歓迎会をやってやるよ」

(そして……)

「バーベキューか(帰りが遅くなりそうだから食事ができるのは嬉しいな)」
「……………」

でも、本校ではバイキングの高級料理、こっちは屋外でバーベキューか……………」

「おいパワポケ、どっちのニワトリがいい？」

「え？」

「どっちが一匹選んでくれたまえ」

「どこが違うのか？」

「こっちが『ピヨ吉』でこっちが『ピヨ子』だ」

「はぁ……………じゃ、ピヨ吉で」

「こっちだな」

（ポキン！！！）

「ピヨ吉イイイ！？」

「じゃ、こいつが歓迎会用な。」

羽をむしるのと血抜きは俺がやっというてやるぜ」

「・・・い、いま、ピヨ吉の首をポキンって・・・！」

「あん？ お前まさかピヨ吉食ったことねえのか？」

「いやねえよ！ニワトリはあるけどピヨ吉はねえよ！」

「お前の目の前で死んでないだけでこれまでたらふく食ってきただろ」

「それは・・・そうだけど・・・」

「ちゃんと残さず食べてやれよ、そのために育てられてきたんだからな」

「う、うん・・・」

でも名前をつけたら愛着沸くんじゃ・・・。

～翌日～

（ポキン！！）

「うわあっ！・・・夢か。」

さすがに目の前でやられるとキツイよなあ・・・」

「おーい起きたか？。今朝のご飯は『ピヨ太の照り焼き』だぞ」

「何で名前つけちゃった！？」

「なんとなくだ。どうした、お前トリ肉は好きだろ？」

「父さん、そのピヨ太って、もともと生きてたって知ってた?」

「そりゃあ知ってるよ。知らない人のほうが少ないだろう」

「知ってるのと理解するのは違うんだよ父さん」

「へえ、なかなかいいこと言うやないか。で、朝ごはんはどないすんの?」

「きよ、今日は朝練早いから遠慮しておくよ・・」
「なんだか食欲沸かないな・・・」

「だったらなおさらちゃんと食わないとダメだろ! オラ食え!」

「うわっ! しよ、食欲が沸かないんだよ!」

「チッ、・・じゃあもつたいないが捨てるしかないな」

「えええ、捨てるの!?!」

「ワトリ、いやピヨ太は無駄死に・・!?!」

「冗談だよ、弁当に入れとくからちゃんと食べてやれよ」

「(ホッ)」

(そして・・・)

「詰井くん、いじめはダメよ」

「あん?」

「都会から来たトツチャン坊やの前でニワトリを絞めたんだって?」

「ニワトリじゃねえ、ピヨ吉だ」

「はいはい、ピヨ吉。で、中学のときに問題になったの忘れたの?」

「俺だって相手を見てやってるさ。シニア大会の優勝チームの立役者だぜ?」

ほら見てみろって」

「？」

(もぐもぐ)

「昼飯にトリを食ってるだろ。ヤツのハートはガラスじゃない、アイアンハードだぜ！」

「シニアって野球の大会？」

「ああ、中学の硬式野球だよ。今はケガで落ち込んでるが、アイツは眠れる虎だ」

「普通、獅子じゃないの？」

「そこはどうでもいい。きつとなにかやってくれるぜ、アイツァ！」

「……何か言われてるな……」

「あれが眠れる獅子、いや虎ねえ……」

ハリコの虎、いや獅子じゃないことを祈るわ」

(スタスタ)

「ちえっ、相変わらずキツイこと言うやつだ」

「……？」

何を言ってるのかさっぱり分からないが……気にしないでおう……」

くで、ある日

「なあ、俺のスイングはどうだ。パワポケ？」

こいつは杉田。

やる気はあるみたいだが、実力はツメイよりも下だと思われる。

「杉田、お前は重心が前に行きすぎだ。こうやって、こうだ！」

(ブンッ！)

「おおー、なるほどな」

・ ・ ・ どうして俺が教える側なんだ。

今頃ユウキは一流のコーチから教えを喰らってるんだろ？な……

「あー、パワポケちゃん！次は俺も頼むわ」

「お前は確か、
軽井紀矢だつたな」
かるいのりや

「そうそう、さすがだね」

「お前、練習にあまり集中できていないぞ」

(.)

「……この音は……まさかケータイの着信音か!？」

「あ、俺俺！俺のケータイ！悪いパワポケちゃん！」

多分彼女からの呼び出しだから帰るわ！
乙！」

「え……おいおい……」

練習が始まってまだ30分だぞ……？」

ケータイも持ち込んでるし……。

どうなってやがんだこの野球部は・・・。

☐ ☒

・いや、他のヤツらはちゃんと練習しているな。
こんな学校ならむしろ軽井みたいなヤツの方が自然じゃないのか・
・？

「やあやあ諸君、ただいま」

「誰だお前」

「オッ！おれのいない間に一人増えてるじゃないか。
おいお前、名は知らんが見知らぬ人に対して誰だお前はないだろ。
ちよつとおれより背が高いからって」

「あ・さては貴様・あなたがムラツチ先生？」

「誰がムラツチだこのやろうが、ぶっ殺すぞ！」
そこまでするのか！？

「おれは村田克哉^{むらたかつや}、開拓分校の体育教師でありながら
野球部の監督、そして甲子園大会優勝経験者だ」

「え・・・」

こんなにちっさいのに・・・。

「で、お前名前は」

「あ、パワポケです」

「カントク、彼は野球に詳しいのでいろいろ教えてもらってます」

「そうなのか、じゃあお前コーチね。露口のお墨付きだしな」

「え、でもカントクは甲子園経験者なんですよね？」

「チツチツチ、甲子園『優勝』経験者だぜ」

「それはすみませんね」

「まあおれはまわりの言うとおりにやってたら連れて行ってもらっ
たって感じ？」

ふうん、要するにダメダメってことかこの人。

「ところで・・カントクはホントにベンチ入りしてたんですか？」
「ベンチ入りどころかレギュラーだよ。」

「・・まあウチの高校には控えなんてほばいなかったしな。
後輩に大神っていうバケモンがいてさ、あとキャプテンと小山とサルと堤・・」

「あー、ハイハイ。もういいッス」

「そうか？　じゃあおれはトイレットにでも行つてくらあ」

（スタスタ）

「・・・・え、大神？」

「そうだよ」

「ツメイか。いつも突然だなお前は。何がそうなんだ？」

「4年前にプロ野球を引退して、今じゃ日本最大の企業、
ツナミの大社長になってる、あの大神だよ。・・あ、今はジャジ
メントか」

「俺、大神投手のファンだったんだけど・・・ホントにあんのジジ
イとチームメイト？」

「残念ながら間違いないぜ。」

調べたらムラツチは大神のいたチームにいた」

「かたやプロ野球選手から大社長。」

かたや野球部のダメ監督か」

逆だったらマジビックリだな。

あはははははははは！

・・・・あー・・哀しい・・。

「あ、そうだ、帰りに駅前の商店街に寄っていこうぜ」

「ああ、あの清^{きよ}ばあさんの息子さんも甲子園を目指す高校球児だったらしい。」

だから俺たち向けのも容易してあるだろ？」

「へえ。．．ところで軽井なんだが、あいつ電話で呼び出されてすぐ帰ったぞ」

「あいつはいつもそうさあ。」

ちゃんと練習すればいい選手になると思っただがな」
まっただ。

どうしてキャプテンは放っておくんだ．．？

「まあここは本校とは違うんだよ。」

野球が好きなやつが集まってるだけだ。

軽井にとつて野球はその程度ってことだろうな．．」

「いや、俺はあいつも野球好きだとおもうよ」

「黙れ杉田」

「ええええええ．．．？」

「ほらよ」

「あ、清^{きよ}ばーさん」

「夢は大きく持ちなよ、私は応援するよ」

「あ．．どうも」

．．応援してくれる人がいるんだから頑張らないとな．．。
やっぱり早く本校に戻らないと．．。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2906y/>

～ 逆襲球児～ To 七島麻美

2011年12月2日18時46分発行